第38回図学教育研究会報告 テーマ：CG/CAD、造形デザイン教育と評価方法

Report on the 38th Graphic Science Education Forum

近藤 邦雄 Kunio KONDO

1. はじめに

CG/CAD、造形デザイン教育が多くの大学で行われている。その教育結果として学生からの提出物、作品がある。知識を問う問題でなく、画像や映像などの製作結果を評価する基準はさまざまな視点がある。このため教育目的と教育内容に対応した評価が各大学で行われている。本研究会では日頃からこのような学生の作品評価を行っている方々から、4件の発表があった。発表者の方には、教育目的、教育内容、課題のほかに学生の提出物や作品、その評価表方法などを紹介していただいた。本研究会は、日時：2006年12月3日(日)に静岡文化芸術大学で行った。

2. 発表概要

(1) 画像処理アプリケーションを用いたロゴ製作を通じた図形教育と評価方法

大月 彩香（九州大学大学院工学研究院）

九州大学の学部低学年生に対する全学教育のうち、図学関連科目の一部を担当しているが、ホームページ製作に関連したロゴ製作を通して「立体感と陰影」をテーマに画像処理アプリケーションを用いた教育を行っている。近年、芸術系の学部ができ、そこに所属する学生が多く受講するようになり、人気が高くなったと同時に作品のレベルも満足できるものになった。本年度の講義内容と提出レポートの評価を通じた知見について報告された。

(2) 学生の視覚における3次元形態把握の実態とその描画表現に対する評価

佐藤 聖（徳静岡文化芸術大学）

デザインや美術造形の領域では、手元での手作業による作図や描画が欠かせないが、まず初めに、描画道具としてのパソコンを使わない作業の中での形態把握の基本を身に付けることの大切さを認識したい。そこでの基本作業の中で作図やデザインスケッチを教え評価すること

が大変重要であると同時に、CADや3D描画ソフトを使用した効率のよい教育方法の確立が必要となる。ものを眼でしっかり観察することが空間把握の基本になり、それに伴う必要な知識を身に付け、そこから理論と描画表現の矛盾を発見して埋めていくことが、学生の作図、デザインスケッチのレベルアップと評価のリアリティー向上につながるのだろう。

(3) 投影法の理解度を評価するための誤った図の活用

鈴木 広隆（大阪市立大学大学院工学研究科）

大阪市立大学において、投影法の理解と作図法の習得を目的として開講されている図形科学Iではこれまで、成績を評価するための学期末試験として、投影法に関する知識を問う穴埋め文章題と、直軸測投影図及び透視投影図の作図問題を出题してきた。近年、大阪市立大学における図形科学教育は、設計製図教育の入門科目ではなく、図を介して適切なコミュニケーションを図るためのスキルと知識を習得することに重点を置いた科目に変化しつつある。そこで2006年前期より、前述の内容に加え、誤った図を提示してその理由を説明させる問題を出题した。本報告では、誤った図の理由に応じた回答の傾向についての検討結果が発表された。

(4) アートのヴィジュアルリテラシー教育としての評価

茂登山 清文（名古屋大学大学院情報科学研究科）

発表者は、2006年6月よりアーティストたちの協力の元に、コンテンポラリーアートの作品を一カ月に1、2回の頻度で、名古屋大学情報科学研究科棟のエントランスロビーに展示している。アートは、学生が通常接している論理的、分析的な思考とは異なり、視覚的な理解を基本としている。そこには必ずしも「正解」があるわけではなく、その意味でも、ヴィジュアルリテラシー教育に有効であると考え、また授業にアーティストを招くなどして、その話を聴き、言語を通じた理解のための機会もつくってきた。これまでは、その効果測定のための

調査などはおこなってはこなかったが、本研究会では、アンケート等、基本的な調査をもとにさまざまな考えが発表された。

3. まとめ

本研究会では、CG/CAD、造形デザイン教育における課題の提出物の評価に関する考えを発表していただいた。学生の提出物をどのように評価するかは「作品」の場合は難しい面が多く、点数つけるために、比較、または順位をもとにしていることが紹介された。また各課題の目的や習得内容に合わせて、評価項目を学生に説明したりチェックリストを作成したりしている事例、学生同士の相互評価なども行っていることも説明があった。

この問題は、造形デザイン分野だけでなく、CG/CADを利用した教育にも同様に「評価」の方法が重要である。今後、図学教育研究会で扱う大きなテーマといえる。

こんどう くにお

埼玉大学

日本図学会副会長、図学教育研究会委員長